

# Buffer (抜粋版)

作：清水ひなた

※一切の無断引用・転用・転載を禁じます。

【登場人物】

※スラッシュで区切られた役は、一人二役を想定。

山谷（ヤマタニ）

先輩（センパイ）

百花（モモカ） ／ 歌手

真悟（シンゴ） ／ やたら盛り付けの上手いビュッフエ客

加来（カク）

見田（ミタ）

メイ ／ 志賀（シガ）

母親 ／ 店員

人々

【舞台について】

次に述べる事項は、あくまで戯曲執筆時における想定であり、演出家などの意向に応じて柔軟に変更して構わないものである。

舞台美術は素舞台を想定している。必要に応じて箱などを設置しても良い。

山谷と先輩がビュッフエ会場に到着してから店を出るまで、他の場を歩き来する間も、舞台上にビュッフエ会場が永続している（場所は公園やその他の場所でありながら、同時にビュッフエ会場でもあり続けている）。つまり、その場に登場しない役を担う演者がビュッフエ客として、ビュッフエを取っていたり並んでいたたりする。ビュッフエ客の身体からそのまま次の場面の役に移行することも多々あるだろう。

○1 「グランドホテル・エレベーターとビュッフェ会場／2024年」

とある地方都市。新しめのグランドホテル。

山谷と先輩が1階から上に登るエレベーターに乗っている。他に乗客はいない。

山谷「え、そうでしたっけ。」

先輩「え、そうだよ。なんで覚えてないの。」

山谷「いやあ……」

先輩「だって、割とさ、」

エレベーターが止まり、人が乗ってくる。沈黙。

数階上がって、人が降りていく。再び山谷と先輩の2人になる。

先輩「割と印象的じゃない？あの喋り方とかさ、あと志賀さんって、こう居そうでいない名前だし。」

山谷「うーん。あんま記憶力ないんですよ、私。」

エレベーターが2人の目的階に到着する。2人はエレベーターを降りて歩き出す。先輩はスマホを取り出し、店の名前等を確認している。

先輩「(スマホを触りながら) だとしても、結構、なんていうの、印象的な利用者さんじゃなかった？」

山谷「まあ、流石になんとなくは覚えてますよ。」

2人、フロアマップを確認する。

先輩「えっと、~~2F~~レストラン……ここか。」

山谷「ですね。」

2人、歩き出す。

山谷「でも、その、写真みたいっていうか。思い出せるのが。」

先輩「ほお」

山谷「すごい、断片？みたいな感じなんですよ。昔のこと思い出す時とか。いや、昔っていうか、最近のこととかでもそうなんですけど。」

先輩「へー。」

山谷「しかも、画質荒めなんです。あの、あれ、ピンボケ写真？こう、ブレブレボケボケな感じ。」

先輩「それぜんぜん思い出せてないじゃん。」

山谷「つすね。」

先輩「へえー、おもしろ」

山谷「先輩はそんなことないですか。」

先輩「うーん。ないね。」

山谷「ないかー。」

先輩「まあ記憶力はある方だからねー。」

先輩が足を止める。到着したお店は立派なレストランである。

先輩「あ、ここだ。すごい。」

店員「いらつしやいませ。」

先輩「あ、予約してた田中です」

店員「はい、田中さまですね。少々お待ちください。」

店員、予約を確認している。

山谷「え？」

先輩「え？何？」

山谷「いや、その、」

店員「お待ちせいたしました。田中……みなみ様でお間違い無いでしょうか？」

山谷、ハッと先輩の方を見る。

先輩「(何食わぬ顔で)はい。」

店員「お待ちしております。お上着の方、お預かりいたしましたでしょうか？」

先輩「あ、お願いします」

山谷「あ、じゃあ私も。」

2人、上着を脱いで店員に渡す。

店員、奥に上着をかけに行く。

山谷「え、あの、田中って。」

先輩「え、何よ」

山谷「いや、しかもみなみって。」

先輩「あ、もしかして山谷って本名で予約するタイプ？」

山谷「え、普通そうでしょ」

先輩「何その普通、どこ基準？」

山谷「えっ、、でも田中って(そんなベタな)」

先輩「(その反応は)何、全国の田中さんに失礼だよ」

山谷「いや、先輩の方が失礼でしょ」

先輩「そうかなー」

店員が戻ってきて、上着の番号札を渡す。

店員「こちらお預かりの番号になります。お席の方ご案内いたします。」

2人は店員の後に着いていく。

店内には、ビュッフェに並ぶ行列ができています。

山谷「あ」

山谷、窓を見つけて、窓からの景色を見ないように背を向ける。横歩きのような体勢になる。

店員「こちらのお席になります。」

店員は座りやすいように席を下げてくれる。山谷、窓を背にした席に向かう。

山谷「私こつちいいですか。」

先輩「いいけど、あれ、高いところだめだっけ」

山谷「いや、そういうわけじゃないんですけど」

店員「お席、ご移動なさいますか？もう少し内側のお座席とか。」

山谷「いや、本当に大丈夫なんです、むしろ窓際なのは嬉しいんです。すみません」

店員「かしこまりました。」

先輩「いいの？」

山谷「はい。むしろここがいいです。」

先輩「ふうん」

2人、席に着く。

店員「お時間120分制になります。あちらがお野菜や前菜類、正面奥がパスタやピザ、ローストビーフなどのメイン料理、右手奥がデザートとなっております。どうぞごゆっくりお楽しみください。」

店員、ハケる。

先輩「うっし、今日は食べるぞー。」

山谷「取り行きますか」

先輩「うん」

2人、席を立つ。

先輩「まあ荷物置いといても大丈夫だよな。」

山谷「まあ大丈夫じゃないっすか、（近くの席を見回して）みんなそんな感じだし。」

先輩「よね。」

山谷、頷く。

2人はビュッフェを取りに向かう。先輩、食事系が並ぶエリアに行こうとすると、山谷は反対側のスイーツが並ぶ方へ。

先輩「え、ちょっと、そっち甘い系だよ」

山谷「はい。」

先輩「うん。え？（何で平然としてるの）」

山谷「あ、もしかして先輩、ご飯系から攻めるタイプの人ですか？」

先輩「え、普通そうでしょ」

山谷「へー。」

先輩「いや、へーってなんだよ」

山谷、構わずスイーツの方へ。

先輩「えー。えっ、どうしよつかない」

先輩、メインとスイーツをキョロキョロと見比べて、山谷と同じ方へ。

## ○2「公園／2022年」

グラウンドホテル（建設中）横の公園。桜の木が連なっている。5分咲き程度。真悟と、彼の姪（メイ）が母親の帰りを待って暇つぶしをしている。メイ、木陰でぴよんぴよんと跳んで遊んでいる。真悟はそれを見守っている。

メイ「けん、けん、ぽ。けん、けん、ぽ。けん、ぽ、けん、ぽ、けん、ぽ、けん、ぽ、けん、ぽ。」

強めの風が吹き、桜の花びらが舞う。風に人の髪や服がなびく。真悟、前髪をかき分ける。

メイ「うわー！綺麗！」

真悟「知ってる？桜吹雪って言うんだよ、こういうの。」

メイ「へー。」

真悟「いや、吹雪ってほどじゃないのかなあ、まだ。」

メイ「けん、けん、ぽっ、ぽっ、けん、けん、けん。」

真悟「それさ、光のところだけ踏んでるの？」

メイ「ん？」

真悟「光の当たっているとこだけしかダメなん？」

メイ「うん。なんでわかったの？」

真悟「まあ、見てたからね。」

メイ「見てたらわかるの？」

真悟「うん。わかったね。」

メイ「ふーん」

メイ、木や枝の影を飛ばして日向を踏もうと遊び続ける。

メイ「けん、ぽ、けん、けん、けん、ぽっ、ぽっ」

真悟「流行ってるん？その遊び」

メイ「暗いところ飛ばし？」

真悟「暗いところ飛ばしって言うんだ」

メイ「うん」

真悟「流行ってるの？友達とかとの間で。暗いところ飛ばし。」

メイ「ううん。今初めてやった。」

真悟「え、そうなの。」

メイ「うん。」

真悟「でも名前、」

メイ「今つけた。」

真悟「……へー。」

メイ「うん」

真悟「名付け親じゃん。すごい。」

そこに母親（真悟の姉）が戻ってくる。

母親「ごめんごめん、お待たせ。」

メイ「おかえりー。」

母親「ただいま。（真悟に）ごめんね、思ったより遅くなっちゃったわ。」

真悟「ううん、全然。俺見てただけだし。買えた？」

母親「うん。バッチリ。見て、これ。卵10個で150円。」

真悟「え、やっす。」

母親「おかげさまで勝ち取りましたー。」

真悟「流石姉貴」

母親「それほどでもー。よし。（メイに）じゃあ帰ろっか」

メイ「えー」

母親「家でおやつ食べよ。」

メイ「うん！帰るー。」

母親「うん、帰ろう。ほら、真悟叔父さんにバイバイして。」

真悟「だからオジサンじゃなくてお兄さんにしてよ」

母親「そつちのおジサンじゃないからいいじゃない。叔父は叔父なんだから」

真悟「でもなんかきー、嫌なものは嫌なんだよ」

メイ「真悟バイバイ」

真悟「あ、バイバイ」

母親「あ、そうだ。これ。食べて。安かったの。」

母親、真悟にコロツケの入った袋を渡す。

真悟「いいのに。」

母親「特売しててき、あんた好きでしょ。コロツケ。」

真悟「うん、好きだけど。」

母親「1個30円だよ。」

真悟「やつす」

母親「うちの分も買ったから。これは食べて。レポートのお供にでも。」

真悟「あ、忘れてた。」

母親「えー、さつきやらなきやつて言ってたじゃん。」

真悟「やります、ちゃんと単位は取る。」

母親「うん、がんばれ！真悟おじさん！」

真悟「あつ（また言った）」

母親「じゃあね。」

母と娘が去っていく。真悟、しばし2人の後ろ姿を見送る。

真悟、メイが跳んでいた跡を見て「暗いところ飛ばし」を真似してみる。

真悟「けん、けん、ぽ。けん、けん、けん、けん、けん、ぽつ、ぽ。けん、ぽつ、ぽ。」

しばらくすると、そこに百花がやってきて、真悟に話しかける。

百花「……日が当たつてるところだけ踏んでるんですか？」

真悟「えっ」

百花「陰になつてるところは飛ばしてる。」

真悟「なんでわかつたんですか」

百花「いや、たまたま、目に入ったというか……。見てたもので。」

真悟「……恥ずかし」

百花「私もやっていいですか、それ。」

真悟「え」

百花「面白そうなんで。」

真悟「え、ああ、はい。どうぞ。どうぞっていうか、別に僕の許可とかいらないうけど、どうぞ。」

百花「ありがとうございます。」

百花、真悟、各々で「暗いところ飛ばし」を始める。

百花「けん、けん、ぽつ……」

真悟「けん、ぽつ、けん、けん……」

少ししてから、

真悟「暗いところ飛ばし、つていうらしいです。これ。」

百花「へー。有名なんですか。」

真悟「いや、姪がさつき名付けました。」

百花「ああ、そうなんですか。」

真悟「はい。」

百花「でも、なんか前にもやったことある気がするなあ。こんなようなこと。」

真悟「え、そうなんですか。」

百花「それこそ子どもの頃とかに。」

真悟「ああ」

百花「はつきりとは覚えてないですけどね。なんか懐かしい感じがする」

真悟「……分かります。」

2人、「暗いところ飛ばし」を続ける。

### ○3「ビュッフェ会場／2024年」

山谷、先輩、メイン料理のビュッフェ列に並んでいる。

先輩「初めてだったわ、甘いの中から食べたの。」

山谷「案外いいですよ、私も人に教えてもらってからこのスタイルです。」

先輩「いつつもき、甘い食べる頃にはお腹いっぱいだからさ。」

山谷「そう。あとあれです、甘いとしよっぱいを行き来するのが最強です」

先輩「（そうだと）思った。お口直しのなね。」

山谷「そうそう。どっちも新鮮に美味しいってなれるから、良いんですよ。」

山谷、離れた所にパンが置かれているのに気が付く。

山谷「わー、あつちにパンもあるじゃん。」

先輩「あるねー。」

山谷「気づいてたんですか」

先輩「まあ、うん」

山谷「（パンの）隣、あれ何だろ、スープとかですかね。」

先輩「カレーとか？」

山谷「パンの隣に？」

先輩「違うかー」

山谷「いや、わかんないですけど」

先輩「パンまでは食べれないかもなあ」

山谷「ほんとに何でもありますよね、ビュッフェって。」

先輩「ね、何でもある。」

山谷「こう、全部見えるじゃないですか。バアーつと。」

先輩「うん」

山谷「こんなにあるんだーと思って、何取ったらいいか全然分かんなくなっちゃうんですよ。」

先輩「あー」

列が進み、2人は料理を取り始める。

○4「駅・パウダールーム（早朝）／2024年」

早朝。夜行バスで駅に着いた見田・加来。見田はリュックを、加来はキャリーケースを持って、パウダールームの順番待ちをしている。鏡の前が空くと、見田はその場の鏡を使って、加来は自分の手鏡を使って化粧を始める。

しばらくすると、加来が大きめのあくびをする。

加来「ねむ」

見田「あんま寝れなかった？バス。」

加来「まあー、うん。あんまねー。ま、寝れなかったことはないんだけどさ。」

見田「そっかー。まあねー。狭いしね、四列だとね、また」

加来「そう。」

間。

加来「……なんか荷物とかさ、大丈夫かなって、いやこうガツと抱えてるから大丈夫なんだけどもさ。」

見田「うんうん。」

加来「あと乗り過ぎないかなーとか、まあ朝電気つくからそれで起きるだろとは思うんだけどさ、なんかね。」

見田「いや、わかるわ。なんかね。落ち着かないよね。揺れるし。」

加来「ね。運転荒い人だとマジ無理。今日結構揺れたからなあ、今日ってか昨日？」

見田「あー。まあめっちゃ配慮してブレーキ踏んでくれる人とかいるけどね。」

加来「ね。」

見田「当たり前外れあるよね。」

加来「あるある。」

2人の化粧は淡々と進んでいく。

○5「ビュッフェ会場／2024年」

山谷、順番に全ての料理を取っていく。

先輩、自分が食べたいものだけを取っていく。

山谷「え、これも美味しそう」

先輩「全部取るじゃん。」

山谷「選べないんですよ。目の前にあるのどんどん取っちゃう。」

先輩「なんかさ、もはや選ばされてるよね。」

山谷「選ばされてる？」

先輩「うん。ビュッフェの方に、こっちが選ばされてる。」

山谷「あー」

山谷と先輩の目線の先に、やたらとビュッフェを皿に盛り付けるのが上手い人がある。

先輩「（小声で）ねえ、あの、前の人、見て。」

山谷「え？」

先輩「あの、前の方で、パスタとか取ってる。」

山谷「ワンピースの女の人？」

先輩「違う。その隣の隣。」

山谷「あ、男の人ですか？白シャツの。」

先輩「そう。あの人さ、プロだね。」

山谷「プロ？」

先輩「ほら（見てみて）」

白シャツの男性、無駄のない動きで皿にパスタやピザ、リゾット、ローストビーフを盛り付けていく。その滑らかな動きはダンスのよう。

山谷「……うつつま。」

2人は思わず男性を凝視する。

（※掲載はここまで。一切の無断引用・転用・転載を禁じます。）